日本語母語話者とインドネシア人日本語学習者の異文化間コミュニケーションにおける「共話」の運用

李　舜炯・沼里　聡・渡辺　真由子・舟根　明日美・山﨑　史輝・富田　あかね

1. はじめに

筆者らは去る2014年9月、3週間に渡り首都大学東京・インドネシア教育大学大学院生研究交流プログラムに参加した*。その際、印象的だったのは非漢字圏のインドネシア人日本語学習者の会話の流暢さである[1]。当初は「なぜこのようにあいづちが上手なのか、なぜ難しいはずの丁寧体と普通体の使い分けが上手にできるのか」等の疑問が沸いたが、時間が経つにつれ、あいづちを含めた日本語の会話スタイル全体に関わる特徴をうまく掴んでいるのではないかという考えに至った。

言語文化の異なる日本語母語話者と会話を交わす際、どのようにコミュニケーションを運用しているのかを考察することは言語習得や日本語教育においても有益であろう。日本語母語話者とインドネシア人日本語学習者のように、会話者同士の共通理解が少ない場面における日本語の会話の特質として、共通して語れる話題を探る、共感や同調のような共通理解を求めるなど、協調的言語行動を行っていることが想定できる。

そこで本稿では、初対面の異文化間コミュニケーションにおいて、円滑に話を進めるための協調的言語行動の一つとして「共話」の会話スタイルに焦点をあてる。「共話」は、水谷(1980:30)によって提唱されて以来、「先取り発話(堀口 1997)」「共同発話(ザトラウスキー2000、宇佐美 2001)」「共同発話文(宇佐美・木林 2002)」「言いさし―割り込み発話(荻原 2002)」などの観点から分析されてきた。分析の対象や範囲に異同はあるものの、2 人以上の話者同士が共同で一つの発話を作るという点では水谷のいう共話と相違がないため、本稿では水谷に従い共話とする。

本稿で分析の対象とする共話とは、「インドネシアの道路は…」と話し始めた相手の発話を引き取って、「いつも混んでますよね」というように会話において2人以上の話者が一つの発話を作り上げる現象のことである。

2. 先行研究

宇佐美(2001)は、共話が起きる際、日本語母語話者による共話の完結が多いこと、日本語学習者が言いよどんでいるところに母語話者が助け舟を出すことなどを報告し

---

* 本研究は平成25年度の首都大学東京の戦略的研究プロジェクト支援国際共同研究支援枠（「日本へのインドネシア移民の日本語教育を支える日尼対照言語学的研究」研究代表者：ダニエル・ロング）の助成金を受けて行われた。

[1] クンチャラニングラット(1980)は「インドネシアには大小あわせて300以上の民族集団、そして250以上の言語を認知できる(1980：6))」と述べている。本稿の調査対象者は、出身地と母語が一律ではないが、便宜上「インドネシア人日本語学習者」として、論を進める。

ている。また、日本語学習者も相対的に少ないとは言え、「予測による発話の完結(堀口 1997)」の形で締めくくることがあると指摘している。

宇佐美・木林(2002)は、後行発話の形式を「一語文」「中途終了型発話」「終了型発話」の3つに、機能を「質問」「答え」「確認」「叙述」の4つに分けて形式と機能という観点から分析を行っている。その結果、中級程度の日本語能力を持つ学習者は母語話者の発話を先取りすることもあると指摘している。また、後行発話の形式においては、「終了型発話」の形をとる場合が多いこと、後行発話の機能としては「叙述」が最も多く、「答え」、「確認」の機能を果たす後行発話は見られないこと、「質問」の機能においては母語場面より接触場面の方での出現割合が4倍ほど高いことが報告されている。

笹川(2007)は、日本語母語話者同士の同文化における共話の類型を分類した黒崎(1995)を参考に、異文化間コミュニケーション場面に見られる共話の類型を①あいづちやパラフレーズなどの副次言語による共話、②共感を表わす文を添加する共話、③発話行為方略などをストラテジーとして用いる共話、④共話の連鎖や、話題領域の交換によるディスコース・レベルの共話の4種類に大きく分類している。これらの類型別分析により学習者も共話の担い手となっていることが指摘されている。

木林(2011)は、主な結果として、日本人と中級話者との接触場面では1.89%、日本人と超級話者との接触場面では1.53%の共話の生起率であり、中級話者の先行発話には「言葉探し」が多いと指摘している。

3. 問題の提起

以上の先行研究に共通する指摘としては、日本語母語話者同士(水谷 1993、黒崎 1995など)や日本語学習者同士(堀口 1997)の会話と同様に、異文化間コミュニケーションにおいても共話が成されるということである。また、宇佐美・木林(2002)では、母語場面、接触場面共に共話の生起率が高くはないが母語場面同様に接触場面でも共話の運用が確認できたと報告されている。このようなことから本稿で対象とする日本語母語話者とインドネシア人日本語学習者間の異文化間コミュニケーションにおいても共話が運用される可能性は予想できる。

異文化間コミュニケーションにおける共話の運用についての先行研究を検討した結果、以下のような疑問点が提起できる。

a. 宇佐美(2001)は、日本語母語話者による共話の完結が多いとしているが、インドネシア人日本語学習者とのコミュニケーションにおいても同様なことが言えるだろうか。
b. 笹川(2007)、宇佐美・木林(2002)では、中級程度の日本語能力を持つ学習者は母語話者の発話を先取りすることもあるなど、類型の分類について言及されている。インドネシア人日本語学習者の場合でもどのような状況であるかを聞き手発話の反応の型を整理した上で考察する必要はないだろうか。

c. 同じく宇佐美・木林(2002)では、共話の後行発話の機能を4分類し、接触場面では「確認」など特定の機能がみられないと指摘しているが、再考の余地はないだろうか。
d. 木林(2011)により、先行発話においては「言葉探し」が最も多いとされているが、話し手発話の表現形式を類別して調べる必要はないだろうか。

しかし、次節で述べるように従来の研究では共話を成す聞き手発話の類型や機能については散発的に言及があるものの、類型と機能が混在しており、実態が明確にされていないこと、話し手発話の表現形式についてはあまり言及されていないことなどが課題として残されている。

そこで本稿では、これらを体系的に考察するため、①話し手発話の表現形式、②類型(反応の型)、③聞き手発話の機能、の3点に着目し、異文化間コミュニケーションが行われる際にこれらがどのような役割を果たしているかを分類し、共話の特徴をさらに明らかにすることを目的とする。これにより異文化間コミュニケーションにおける共話をより明確に把握することを目指す。

4. 本稿における共話の定義と範囲

本稿では李(2015)に従い、共話を「会話の中で話し手と聞き手が共同で一つの発話を作り上げ、共話を成す聞き手発話を抜き取った場合、会話の前後の流れが分からなくなるもの」と定義した。また、日本語の会話形態を話し手発話が遮られているか否か、聞き手発話を抜き取っても話の前後の流れが分かるか否かによって、1.共話、2.疑似共話、3. 質問・応答会話、4.対話のように4分類した。ここではそのうち、本稿で取り上げている共話の例とそれに関連する疑似共話の具体例を見てみたい[2]。

(1) 26JN1　あ、じゃあ、インドネシアに
　27IN1　そう、インドネシアに（へー）ジョグジャカルタに（あー）私はジョグジャカルタに住んでいます。
　28JN1　私、この前、今度、ジョグジャカルタに行こうかなーって

例文(1)の場合は「あ、じゃあ、インドネシアに」という JN（日本語母語話者，以下同様)の「言いさし」発話に、下線部の「そう、インドネシアに（へー）ジョグジャカルタに（あー）私はジョグジャカルタに住んでいます。」と、IN(インドネシア人日本語学習者，以下同様)が同意のあいづちと共に JN の発話を繰りかえし、補足していることが分かる。

例文(1)の「そう、インドネシアに（へー）ジョグジャカルタに（あー）私はジョグ

[2] 宇佐美(2001)などは共話を音声的な重なりの有無と繰りかえしの有無によって、共話自体を再分類している。宇佐美の分類では本稿で疑似共話にしている部分まで共話として扱われている。

ジャカルタに住んでいます」という下線部 27IN1 の発話がないと、26JN1 の「あ、じゃあ、インドネシアに」と 28JN1 の「私、この前、今度、ジョグジャカルタに行こうかなーって」の発話はうまくつながらず、話の前後の流れが分かりにくい。ということは、(1)の 27IN1 の発話は 26JN1 の発話意図と一致しているということであり、1 つの発話文を作りあげるのに必要な一部分を話者 IN1 が担っていると言えるだろう。このことによって、この発話は相手の話している内容に対する理解をアピールする働きを持つことになる。これは次の例文(2)の場合も同様である。

(2) 39IN1　そのあたり、ジョグジャカルタシティーだけ
　　40JN1　土日はでもやっぱ混んでますよね
　　41IN1　ああ、ジョグジャはバンドンと同じかなあ、けっこう混んでます

例文(2)では、週末を利用してジョグジャカルタの遺跡を見物したいと言った JN に対し、IN が「そのあたり、ジョグジャカルタシティーだけ（週末だけでまわれるなら）」という「言いさし」発話を行い、下線部 40JN1 が「土日はでもやっぱ混んでますよね」と問いかえしの反応の型で確認を取っていることが分かる。

一方、擬似共話は、次の例文(3)の 75JN5 と 76IN5 のような発話である。

(3) 75JN5 その前は？その、インドネシアにいて、日本語勉強した時は「よろしくおねがいします」は、使い、よく
　　76IN5　よく、はい、よく使いました。
　　77JN5　会話の練習とかにも（はい）出てきました？

これまでは、上記例の 75JN5 と 76IN5 の発話にあたる箇所だけを取り上げ、共話の一種とみなされてきたが、下線部 76IN5 の発話がなくても 75JN5 の発話と 77JN5 の発話は無理なくつながるため、76IN5 の発話は必ずしも 1 つの発話文を作り上げるのに必要な要素とは言えない。従来の共話の定義と範囲であると、共話であるかどうかの判定に疑問が抱かれる場合が少なくないため、本稿では従来の研究で共話と扱っているものの中核的な部分を共話とする。よって以下、上記例文(1)の 26JN1 と 27IN1、(2)の 39IN1 と 40JN1 の発話のような共話のみを対象に分析、考察を進める。

5. 研究方法

従来の研究でも共話の運用調査の手法として用いられた初対面会話を扱い、そのデータを収録した。具体的な会話の概要及び分析の方法は次の通りである。

5.1　データの概要

本稿で用いる談話データは日本語母語話者とインドネシア人日本語学習者の 1 対 1

の会話を録音し、文字化した音声付きデータである。協力者は20代から50代の日本語母語話者5名と20代から40代のインドネシア人日本語学習者5名であり、それぞれの初対面の雑談会話を記録した。具体的なデータの概要は、以下の表1の通りである。

【表1】調査データの概要

会話NO	会話者 JN:日本語母語話者 (①出身地, ②性別、③世代、④専攻、⑤職業) IN:インドネシア人日本語学習者 (①日本滞在歴, ②性別, ③世代, ④専攻, ⑤職業, ⑥日本語能力)	総発話数	発話時間
1	JN1：①東京都, ②女性, ③30代, ④日本語教育学, ⑤大学院生／日本語教師 IN1：①滞日歴(6年), ②女性, ③40代, ④日本語, ⑤大学院生／日本語学校経営, ⑥N1	208	12分
2	JN2：①東京都, ②男性, ③20代, ④日本文化, ⑤学部生 IN2：①滞在歴(なし), ②男性, ③20代, ④日本語, ⑤大学院生／日本語教師, ⑥N2	478	14分
3	JN3：①福岡県, ②女性, ③20代, ④日本文化, ⑤学部生 IN3：①滞在歴(なし), ②女性, ③20代, ④N3, ⑤英語, ⑥独学で日本語学習／小学校教師	473	17分
4	JN4：①富山県, ②女性, ③20代, ④日本語教育学, ⑤大学院生 IN4：①滞在歴(3か月), ②女性, ③30代, ④日本語, ⑤大学院生／日本語教師, ⑥N1	127	13分
5	JN5：①埼玉県, ②男性, ③50代, ④日本語教育学, ⑤大学院生／日本語教師 IN5：①滞在歴(6カ月), ②女性, ③30代, ④日本語, ⑤大学院生／会社員, ⑥N1	144	10分
	総発話数	1430	66分

5.2 分析方法

従来の研究では共話の類型を述べる際に、聞き手発話にのみ注目する傾向があり、共話の全体像を述べるのに偏りがあったと考えられる。そこで、本稿では、先述したように異文化間コミュニケーションにおける共話の展開構造を明らかにするため、話し手発話と聞き手発話のそれぞれの立場から構造を再考した。以下の表2のように李(2015)は従来の研究での共話の類型を踏まえつつ、実際の自然談話データを考察し表現形式と機能などを探り出し、共話を成す話し手発話と聞き手発話の両方の立場から再分類し提示している。本稿の分類も李(2015)に従い、分析に臨んだ。そして、共話の判定については筆者らによるもので、3名の判定が一致した場合のみをその判定結果とした。

【表2】従来の研究にける共話の類型

水谷(1988、1993)	終助詞の使用、言いさし	
	あいづち、相手の発話を完結、相手の発話内容の復唱	
黒崎(1995)	先取り型、補足型、助け舟型、言い換え型、共感型、割り込み型、リレー型	
宇佐美・木林(2002)	後行発話の形式：一語文、中途終了型発話、終了型発話	
	機能：質問、答え、確認、叙述	
笹川(2007)	(1)笑い、あいづちやパラフレーズ等により共感を示す共話 (2)文の後半をもう一人の話者が引き継ぎ、完成させる共話 (3)推測などより相手の言うべき文を添加する共話 (4)発話行為により相手と協調関係を志向する共話 (5)文を引き継ぎ助ける共話 (6)発話連鎖による複雑な共話 (7)談話構成のレベルでの共話	
李(2015)	話し手発話の表現形式	①言いさし、②言いよどみ、③遮られ
	聞き手発話の反応の型	①先取り、②言いかえ、③問い返し、④遮り、⑤繰りかえし
	聞き手発話の機能	①確認、②話し手助け、③同意、④補足、⑤共感、⑥反論

6. データの分析

本節では母語話者(JN)とインドネシア人日本語学習者(IN)の共話運用の特徴をみるため、①共話の出現状況、②分析の対象とした「話し手発話の表現形式」、「聞き手発話の反応の型」、「聞き手発話の機能」の具体例および量的出現傾向などについて概観する。

6.1 共話の出現状況

調査データをもとに、母語話者（JN）とインドネシア人日本語学習者（IN）の会話中に出現したJN・INそれぞれの聞き手発話の反応数および共話数を調べ、まとめたのが以下の表3である。

宇佐美・木林(2002)は、母語場面、接触場面ともに共話の生起率は1%台に留まると指摘している。また、木林(2011)も 日本人と中級話者との接触場面 1.89%、日本人と超級話者との接触場面1.53%の共話の生起率が見られたと報告している。従来の研究においては母語場面同様に接触場面においても共話は観察されるが、共話の生起率は低いことが指摘されている。このような状況の中で、次の表2の共話を成す聞き手発話の反応数に注目すると、インドネシア人日本語学習者が母語話者同等もしくは、母語話者より多く共話が運用できるという結果が得られた。

【表3】共話数と聞き手発話の反応数

会話NO	1		2		3		4		5	
会　話　者	JN1	IN1	JN2	IN2	JN3	IN3	JN4	IN4	JN5	IN5
聞き手発話の反応数	8	11	4	0	4	3	1	5	6	7
共　話　数	19		4		7		6		13	

6.2　分析の対象

本稿では、自然談話における共話の展開構造を明らかにするために「話し手発話の表現形式」、「聞き手発話の反応の型」、「聞き手発話の機能」を分析の対象とする。それぞれの具体的な種類、定義、具体例は次の表4の通りである。

【表4】共話を成す話し手発話の表現形式および聞き手発話の反応の型と機能

(それぞれの表現形式，反応の型，機能に関連する部分には下線で示す)

話し手発話の表現形式	定義および具体例
言いさし[3]	■話し手が文の最後まで言いきらず発話の途中で間を作る発話 62JN1 で、ご主人はそのまま就職、 63IN1 ではなくて、えっと、博士まで。 64JN1 あ、[大学名]の？
言いよどみ	■適当な表現がすぐに出てこず、口ごもる発話 470IN3 そのくらい、はーい、もう（笑い） 471JN3 じゃあ、終わります。 472IN3 はーい、じゃあ、ありがとうございます。
遮られ	■話し手と聞き手の発話の声が重なる場合が多く、話し手が話している途中に聞き手が入り込んで中断させられる発話 91JN4 なんかよく日本のご飯て、食べ物は(はい)あの油だけでも、ポーク 92IN4 それはそこまで確認するのは難しいです、はい。 93JN4 なんかお菓子にもはい、なんか、お菓子にも、あの…
聞き手発話の反応の型	定義および具体例
先取り	■話し手発話の先を予測していう発話 61JN5 あ、道を聞く 62IN5 道を聞くときに…「東京駅に行きたいですから」 63JN5 「どうやっていったらいいですか」みたいな
言いかえ	■話し手発話と同じ内容を別の言い方で表現する発話

[3] 「言い切り」に対する意味で、主節を欠いた統語的に不完全な文による発話で、内容的には完全な「文」と同等の完結性を持った発話ばかりを「言いさし」と定義付ける場合もある(白川2009：1)。本稿では、「本が…」と言いかけてやめたり、「フルーツ」と言おうとして「フル…」と言ってやめたりなど、比較的短時間の間に発話を打ち切ってしまうような発話まで視野に入れて分析の対象とした。

	78IN4 挨拶以外（うん）挨拶以外は一、えっと一、ん一道の(道の)方法、 79JN4 あっ、道を聞く 80IN4 はい、道を聞くとか
問いかえし	■話し手発話について質問する発話 5IN1　いや、ん一、まあ、実は主人の仕事で 6JN1 あ、もう、結婚しているんですか 7IN1 そうなんです。で、子どもたちもいっしょに（へ一）[地名]にいて6年間くらいかな。
遮り	■話し手発話を途中で中断させる発話 182IN3　おすすめのインドネシアの 183JN3　今まで言ったのじゃないやつ 184IN3　お一、それはね、えっと一、バンドンの(うん)料理はどうですか？
繰りかえし	■話し手発話を同じ言い方で反復する発話 66JN4 暖房は、 67IN4 あ一暖房はつけました。つけても朝起きた時に、あの一痛いですね 68JN4 え一、やっぱり、インドネシアは暖かい国だから
聞き手発話の機能	定義および具体例
確認	■話し手もしくは聞き手の情報について発話内容を確認する役割 344IN2 えっと、言語学の、 345JN2 言語学の博士、お一、なんか大学の先生 346IN2 はい。
話し手助け	■話し手の言い淀みまたは長い間を助ける役割 64IN3　日本へ行きて(そう)行くとしたら、 65JN3　日本に、行くときに、この日本語は覚えてた方がいいよっていう、 66IN3　あ一そっか、えっとえっと、あいさつとかかな？
同意	■話し手の発話内容と自分の考えや意見が同様であることを示す役割 186JN1　「オセワニナリマス」ね、あ一、「ヨロシクオネガイシマス」ね、あ一、それもインドネシア語では 187IN1　ないんですよ、「ヨロシクオネガイシマス。」 188JN1　でも、大切？
補足	■話し手の発話内容に対して知らない情報を付け加える役割 68JN4　え一、やっぱり、インドネシアは暖かい国だから、 69IN4　はい、そうです。一年中いつも暖かいので初めてそんなに（うん）寒いところに、はい 70JN4　すごい暖かいからすごい寒い（そうですね）大きな違い、ジャンプですね。（はい）あっ、そうなんですね。
反論	■話し手の発話内容と自分の意見が同様でないことを示す役割 120JN1 [人名1]て、今[大学名]の博士課程の方とこの前学会で会って、で、その彼女が[地名]から東京に来たんですけど、その後[大学名]、多分その[人名2]先生 121IN1　[人名2]さん 122JN1　あ、学生ですか？

6.3 共話を成す「話し手発話の表現形式」および「聞き手発話の反応の型と機能」

日本語母語話者とインドネシア人日本語学習者との異文化間コミュニケーションにおける共話を成す話し手発話を分析したところ、次の表5に示すように日本語母語話者は「言いさし」を、インドネシア人日本語学習者は「言いさし」と「言いよどみ」による表現形式の使用が多いことが確認できた。

【表5】話し手発話の表現形式の出現回数

表現形式	日本語母語話者	インドネシア人日本語学習者
言いさし	16	9
言いよどみ	4	10
遮られ	6	4
合　計	26	23

次に、共話を成す聞き手発話を分析したところ、次の表6のように、日本語母語話、インドネシア人日本語学習者ともに「先取り」による反応の型を多く用いることが分かった。

【表6】聞き手発話の反応の型の出現回数

反応の型	日本語母語話者	インドネシア人日本語学習者
先取り	8	15
言いかえ	2	5
問い返し	6	1
遮り	1	1
繰りかえし	6	4
合　計	23	26

さらに、共話を成す聞き手発話の機能について分析したところ、次の表7のように両者間の違いが確認できた。母語話者の場合は主に「確認」の機能で使うのに対し、インドネシア人日本語学習者の場合は「補足」の機能で使用することが分かった。

【表7】聞き手発話の機能の出現回数

機　　能	日本語母語話者	インドネシア人日本語学習者
確認	12	3
話し手助け	5	5
同意	2	2
補足	4	14
反論	0	2
合　計	23	26

7. データの考察

本節では、6節で明らかになった量的出現傾向をもとに、「話し手発話の表現形式」、「聞き手発話の反応の型」、「聞き手発話の機能」においてどのような質的な特徴があるのか、母語話者とインドネシア人日本語学習者との比較考察を行う。

7.1 話し手発話の表現形式「言いさし」

話し手発話の表現形式のうち、母語話者で最も多く見られたのが、「言いさし」で16例、インドネシア人日本語学習者では「言いよどみ」が10例、「言いさし」が9例であった。インドネシア人日本語学習者に「言いよどみ」が多くみられたのは、先述の「問題の提起 d」で取り上げた、中級話者の先行発話には「言葉探し」が多くみられたという木林(2011)の指摘を部分的に支持する結果となった。インドネシア人日本語学習者による「言いよどみ」発話は、非母語話者であるがゆえ、適当な言葉がすぐに出てこなかったという要因も考えられるため、共話を成すために必要な話し手発話のうち、「言いさし」は母語話者の発話にもインドネシア人日本語学習者の発話にも比較的出現しやすい。しかしながら、「言いさし」発話が行われた話の内容を見てみると、母語話者とインドネシア人日本語学習者には相違が見られる。

以下の例 (4) (5) はそれぞれ日本語母語話者、インドネシア人日本語学習者の「言いさし」例である。(4) は IN4 が以前宮城県を訪れた際の話をしている場面であるが、冬の宮城県は寒く、暖房をつけなければならないという情報を持っている JN4 が、あえて下線部「暖房は」と聞き手にバトンを渡すように発話を促しており、相手と共に話を作り上げようとする気配りが感じられる。

(4) 66JN4　<u>暖房は</u>、
　67IN4　あー、暖房は、あのつけました。つけても朝起きた時に、あのー、痛いですね。
　68JN4　えー、やっぱり、インドネシアは暖かい国だから

一方で、(5) では、インドネシア人日本語学習者である下線部 62 IN5 は、「東京駅に行きたいですから」という「言いさし」の表現形式を用いてはいるものの、IN5 の発話に躊躇や戸惑いを感じ取った聞き手 JN5 が「『どうやっていったらいいですか』みたいな」と補足していることからも IN5 が気配りを意図して「言いさし」しているわけではないことがうかがえる。すなわち、母語話者の「言いさし」のように相手への配慮から会話のターンをゆずったわけではないということである。

(5) 62IN5　道を聞くときに、「<u>東京駅に行きたいですから</u>」
　63JN5　「どうやっていったらいいですか」みたいな
　64IN5　そして、「ありがとうございます」。

7.2 「先取り」の聞き手発話の反応の型

先述した「問題の提起 b」を明らかにするため、共話を成す聞き手発話の反応の型を分析したところ、「先取り」が母語話者、インドネシア人日本語学習者ともに最も多い結果となった。宇佐美・木林(2002)で中級程度の日本語能力を持つ学習者は母語話者の発話を先取りすることもあるとするが、インドネシア人日本語学習者の場合は母語話者よりもその使用に多様性が見られた。

聞き手発話の反応としては、先述したように「先取り」に対する反応の型の機能を見てみたところ、母語話者は、「確認」「話し手助け」「補足」の3種類を使用しているのに対し、インドネシア人日本語学習者は「確認」「話し手助け」「補足」「反論」「同意」と、母語話者よりも多様な機能を用いて適切に運用していることが分かった。

「先取り」に関しては、「言いさし」に見られたような質の違いは見られず、インドネシア人日本語学習者でも運用できる可能性が高いことが分かった。以下の表8はインドネシア人日本語学習者が実際に「先取り」で用いた機能を例示したものである。

【表8】 インドネシア人日本語学習者が「先取り」で用いる機能

確認
275JN3 日本人は多分、みんなスマトラって聞くと、ああ、あの何年か前に 276IN3 津波？ 277JN3 っていう
補足
120JN5 へー、で、インドネシアでは 121IN5 インドネシアでは不動産と留学エージェント 122JN5 へえ、留学？
同意
187JN1 それもインドネシア語では 188IN1 ないんですよ、「ヨロシクオネガイシマス」 189JI1 でも大切？
話し手助け
59JN4 宮城って 60IN4 上です、北海道の下、でもまだ本州 61JN4 あー、そうなんですね、私行ったことがちょっとなくて
反論
132JN1 じゃ、今〈友人Y〉も 133IN1 今、〈友人Y〉は、うちのママ、ジャカルタにいるママに頼んで（笑い）ママのところに5日間 134JN1 ふーん、そうなんだ。

7.3 母語話者の「確認」とインドネシア人日本語学習者の「補足」の機能

宇佐美・木林(2002)では、後行発話の機能として「確認」は見られないと指摘するが、本稿での分析の結果、機能として母語話者は「確認」、インドネシア人日本語学習

者は「補足」が多くみられた。インドネシア人日本語学習者の場合、「確認」の機能が全く現れないわけではないが、やはりその出現数が3例に留まっている。今回の自然談話はインタビュー形式であり、全般的に母語話者側から会話の端緒を作り、ターンをとって主導することが多くなっている。例えば、母語話者の場合、次の例文(6)では、5IN1 「いや、んー、まあ、実は主人の仕事で,,」のように相手から引き出した発話を材料に、下線部 6JN1 「あ、もう、結婚しているんですか」のように相手の記憶を刺激し、会話を続け、話題を広げようとする努力が窺える。

(6) 5IN1 いや、んー、まあ、実は主人の仕事で,,
6JN1 あ、もう、結婚しているんですか
7IN1 そうなんです。(へー) で、子どもたちもいっしょに (へー) 筑波にいて6年間くらいかな。

次に例文(7)の場合は、インドネシア人日本語学習者が、51JN1 「じゃあご主人もジョグジャカルタに」から連想されるものを下線部 52IN1「そう、主人もジョグジャカルタ。子どもも。」のように「補足」することによって単純にこれに応えているのである。

(7) 51JN1 じゃあご主人もジョグジャカルタに
52IN1 そう、主人もジョグジャカルタ。子どもも。
53JN1 でももう息子さんたちって、日本の方が長い、わけではないですか。

しかし、母語話者が推測を促し導こうとする方向は、そうした「補足」から踏み出すものであり、日本語の会話に不慣れな聞き手には予測が難しいと思われる。以上のような結果から、こういった予測は、日本語学習者が上級、超級を目指す際に遂行しなければならない課題の一つとなるであろう。

今回の調査と並行して、母語話者同士の会話の様子も記録した。これを同様の観点から観察してみると、会話と内容についてお互いに了解している事柄が増え、「確認」を受けた側は、それに応じるに留まらず、相手の意図や推意をつかみ、(8)の下線部 2N2 のように会話を積極的に進めていると思われる部分が確認できる。この例は、大学生の日本語母語話者2名、(N1＝インタビュアー、N2＝受け手)の会話の一部である。

(8) 1N1 なんかね年齢的にね、本当にもう、タイムリミットばっか考えちゃって、最近。(あー、あーそうか) だから早いうちにやりたいこと、やりたいことっていうかその、うーん、どっちなんだろうかなって
2N2 それは人それぞれかもしれませんね。社会に出ちゃってからまた大学に戻るなんてちょっと難しい選択になっちゃますもんね。
3N1 そうそう、そうなんだよねー

8. まとめと今後の課題

初対面かつ文化的背景を共有しない者同士の会話で共話がどのように運用されるかをみるため、日本語母語話者とインドネシア人日本語学習者の会話を分析、考察した。詳細な結果は次のようにまとめられる。

i. 共話を成すために必要な話し手発話のうち、「言いさし」は母語話者にとってもインドネシア人日本語学習者にとっても比較的容易であることがうかがえる。しかしながら、「言いさし」が行われた発話の内容を見てみると、母語話者は相手と共に話を作り上げようとする気配りが感じられたのに対し、インドネシア人日本語学習者からはそのような意図が見られず、相違があることが確認できた。

ii. 母語話者、インドネシア人日本語学習者ともに最も多かった聞き手発話の反応の型は「先取り」であった。その機能を見てみるとインドネシア人日本語学習者は母語話者よりも多様な機能で共話を運用していることが分かった。

iii. 母語話者は、「確認」の機能を通し相手から引き出した発話を材料に、相手の記憶を刺激し、会話を続け、話題を広げようとするが、インドネシア人日本語学習者は、そこから連想されるものを「補足」することによって単純にこれに応えているという違いが見られた。

本稿では、従来の研究より共話の定義と範囲が制限されているにも関わらず、インドネシア人日本語学習者も母語話者のように共話ができることを改めて確認した。また、本稿の内容からは離れるが、母語話者の共話のパターンでよくみかける2回以上の共話の連鎖もインドネシア人日本語学習者の会話から確認できた。インドネシア人日本語学習者の共話の運用実態をみるためにはこれらも念頭に入れた考察が必要であるが、これらについては今後の課題とする。

参考文献

李舜炯(2015印刷中)「自然談話における「共話」の展開形式と機能」『日本語学会2015年度春季大会予稿集』日本語学会

宇佐美まゆみ(2001)「会話における「協調的行動」—ポライトネスの観点から—」『2001年度日本語教育学会秋季大会発表予稿集』pp. 163-168, 日本語教育学会

宇佐美まゆみ・小林理恵(2002)「母語場面と接触場面における『共同発話文』の比較」『社会言語科学会第10回研究大会予稿集』, pp. 15-20, 社会言語科学会

荻原稚佳子(2002)「日本語インタビューにおける「言いさし—割り込み」の連鎖—対人コミュニケーションの視点から—」『異文化コミュニケーション研究』14, pp. 57-77, 神戸外国語大学異文化コミュニケーション研究所

木林理恵(2011)『日本語母語場面と接触場面における共同発話文の総合的研究—ディスコースポライトネスの観点から—』東京外国語大学大学院 博士論文

黒﨑良昭(1995)「日本語コミュニケーション―「共話」について―」『園田学園女子大学論文集』30 - Ⅰ, pp. 45-60, 園田学園女子大学
クンチャラニングラット編加藤剛・戸屋健治・白石隆訳(1980)『インドネシアの諸民族と文化』めこん
笹川洋子(2007)「異文化コミュニケーション場面にみられる共話の類型」『神戸親和女子大学言語文化研究』1, pp. 17－40, 神戸親和女子大学
ザトラウスキー、ポリー(2000)「共同発話における参加者の立場と言語・非言語行動の関連について」『日本語科学』7, pp. 44-69, 国立国語研究所
白川博之(2009)『「言いさし文」の研究』くろしお出版
堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
水谷信子(1980)「外国語の修得とコミュニケーション」『言語生活』, pp. 28-36, 筑摩書房
_____(1983)「あいづちと応答」水谷修編『講座　日本語と表現 3　話しことばの表現』, pp. 37-44, 筑摩書房
_____(1988)「あいづち論」『日本語学』, 7-12, pp. 4-11, 明治書院
_____(1993)「「共話」から「対話」へ」『日本語学』12-4, pp. 4-10, 明治書院
嶺川由季(2001)「大学院のゼミ談話で見られる日本語母語話者の「対話」「共話」の使い分け」『社会言語科学』3-2, pp. 39-51

(い　すんひょん・首都大学東京大学院博士後期課程)
(ぬまり　さとし・首都大学東京大学院博士後期課程)
(わたなべ　まゆこ・首都大学東京大学院博士前期課程)
(ふなね　あすみ・首都大学東京大学院博士前期課程)
(やまさき　ふみき・首都大学東京日本文化論専攻)
(とみた　あかね・首都大学東京日本文化論専攻)